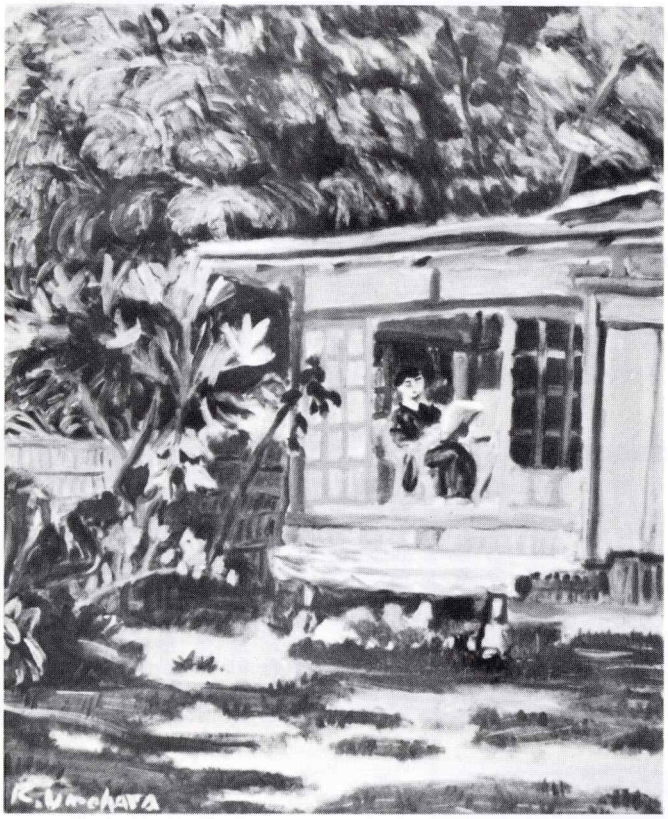
みる つくる かたる

千葉県立美術館報
VOL.9　NO.4
（通巻 38号）
昭和57年12月25日発行
編集・発行人　高橋在久

〒260
千葉市中央港1丁目10番1号
☎0472－42－8 3 1 1（代表）



梅原龍三郎「竹窓読書図」

《特別展》金工の世界

新年一月より、金工芸術に焦点をあてた特別展「金工の世界」を開催します。

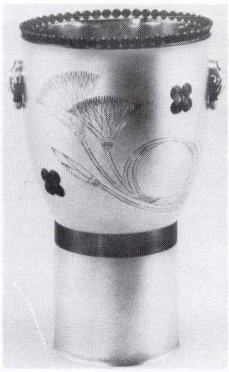
本展は、明治から昭和までの各時期の代表的な作家の作品を中心に展観し、技法にも触れながら、多様な発展を見せた金工の独特な技と美の世界を探ろうとするものです。

金工は古来、仏教器物、あるいは武具や茶道具、文具などの需要と共に、その技術が開発され、発展してきました。

明治の文明開化期を迎えた金工界は、急激な社会改革の影響を受け、その活動は一時期停滞しましたが、明治の後半期には日本内外の美術の研究などが反映し、新時代に即した美術工芸への気運が高まりました。こうして、種々の金工研究団体が誕生し、帝展への工芸部設置なども拍車となり、金工は時代と共にさまざまな傾向を示しながら向上発展し、技術的にも意匠的にも多様化し、工芸の枠にとらわれない新しい造形も見受けられるようになりました。

金工の技法は、主なものとして鋳金、鍛金、彫金があります。鋳金は、金属をとかして鋳型に入れて作品を造ります。鍛金は、金属をたたいて板状にのばし、成形します。彫金は、金属を彫刻したりして装飾する技法です。さらに、その中でも種々の技法があるわけで、今回の展示予定作家には、独特な伝統技法によって重要無形文化財保持者（人間国宝）として活躍された方、また活躍中の方も数名含まれています。

各種の技法により創造された作品の展観は、他の芸術とはまた味わいの異なった、清新な美を皆様に与えるものと確信いたします。



海野　清「青銀花器」

展示出品予定は五十七作家一一三点、作家の方々は次の通りです。

本間琢斎、加納夏雄、黒川栄勝、鹿島一布、海野勝珉、塚田秀鏡、鈴木長吉、豊川光長、平田宗幸、香川勝広、岡崎雪声、初代宮田藍堂、大国柏斎、大島如雲、海野美盛、香取秀真、津田信夫、清水南山、石田英一、佐々木象堂、海野清、山本安曇、杉田禾堂、北原千鹿、山本純民、根来実三、高村豊周、大木秀春、内藤春治、林万寿人、豊田勝秋、鹿島一谷、中野恵祥、香取正彦、丸谷端堂、山室百世、長野垤志、会田富康、大須賀喬、二代宮田藍堂、信田洋、海野建夫、内藤四郎、関谷四郎、山脇洋二、三井安蘇夫、染川鐵之助、蓮田修吾郎、津田永寿、帖佐美行、鈴木貫爾、山下恒雄、宮田宏平、平松保城、鈴木治平、越智健三、大須賀選

会期・観覧料

・会期
昭和58年1月21日(金)～2月24日(木)
開館時間　午前9時～午後4時30分　月曜日休館

・入場料
一般五百円(三百円)　大・高生三百円(二百円)　中・小生二百円(七十円)　(　)内は20名以上の団体料金

特別展「絵地図の魅力」を終えて

特別展「絵地図の魅力」は九月十一日(土)から十月十三日(水)まで開催した。初日から台風の影響による豪雨に見舞われ、実開催日数の半分は雨天。しかも土・日・祝日の七割が雨であった。お天気には、ハラハラの連続で終始した。しかし、悪天候にもかかわらず京阪神方面からも日帰りで見学の方々もあり、絵地図の根強い人気を再認識した。

「五街道分間延絵図」等重要文化財七点を含む約百三十点の展示作品を公開し、日本の近代絵画のルーツを探り、日本画と洋画の原点の一つが地図づくりであった、ということを考える機会とすることも特別展の目的の一つだった。

本展に関連し九月二十六日(日)、国立国会図書館主査で江戸文化研究家の朝倉治彦氏を講師に迎え、「名所と絵地図」と題して講演会を開催した。絵地図には、地図そのもの、絵画風のもの、絵画そのものと見られるものがある。それは、地図を描いた人が狩野派をはじめ絵師であったこと。鳥瞰による表現を中心にかなり美術的な発達をし、人間の日常が絵画的に投影していること。日本での絵地図の研究はまだ新しく、鳥瞰に注目するようになったのは昭和三十年代以降で、現在は、地図資料の整理期であり、今後、本格的な展開が期待される。

また、十月九日(土)に美術を語る会を開催し、話題提供者に習志野市立大久保図書館長森田保氏を囲み、「絵地図の世界―橋本貞秀をめぐって―」というテーマで活発な語り合いがなされた。

常設収蔵作品展

第二期　十二月三日～一月十六日
第三期　三月二日～三十一日

収蔵作品展は、新収蔵作品をはじめ、これまで本館で収蔵してきた作品を、随時、展示替えを行いながら広く公開しています。

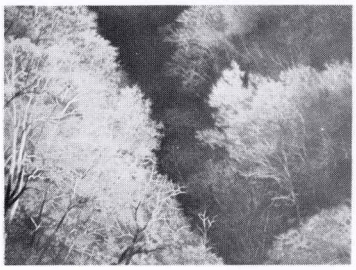
本年度は三期に分けて開催していますが、第一期に引き続き浅井忠とその周辺作家の作品、千葉県にゆかりのある作家及び千葉を題材にした作品、水彩作品等、いくつかの観点にたち、第二期、第三期と一部展示替えを行って展観します。

主な展示作家は、本県の生んだ日本近代洋画の先駆者、浅井忠を中心に師のフォンタネージをはじめ、弟子の石井柏亭、安井曽太郎、梅原龍三郎、田中善之助、黒田重太郎等。日本美術における近代以降の房総にゆかりのある作家の椿貞雄、東山魁夷、藤田喬平、長谷川昂、大石隆子、浜口陽三等、幅広く房総の美術家を紹介していきます。

展示内容（第二期）

・日本画
東山魁夷「門」「秋深」、加倉井和夫「穀機」、高畑郁子「メスティーソの女達」

・洋画
クールベ「雪の中の小鹿」、コロー「フォンテンブローの風景」、フォンタネージ「神女之図」、浅井忠「農婦」、都鳥英喜「八瀬の秋」、石井柏亭「安倍川」「舞姫」、梅原龍三郎「竹窓読書図」、伊藤快彦「林檎」、桜井忠剛「バラ」、田中善之助「パリの女」、榊原一広「南仏風景」、小川千甕「港」、霜鳥之彦「緑のスウェーター」、長谷川良雄「晩秋」、中林儁「冬の風景」、加藤源之助「秋の山（大和初瀬村）」、田中志奈子「デッサン」、安井曽太郎「デッサン」、黒田重太郎「浴後」、白滝幾之助「エジプト」「伊国ナポリ」、不破章「奥鬼怒の湯治場」「三人姉妹」、中西利雄「曇り日の離宮と駅」「外房風景」、小堀進「南欧の丘」「冬晴れの果樹園」、椿貞雄「八重子像」「春夏秋冬図屏風」「鋸山から見た風景」「黒壺に椿一輪」「水彩画家」「山茶花図」、桜田精一「冬の並木道」、笹岡了一「放蕩息子の帰宅」、遠藤建郎「朝市」、山谷鉄一「風」、林倭衛「岩和田海岸」、鳩川誠一「星祭」、榎本了三「花籠」


東魁夷「秋　深」

・工芸
佐治賢使「苑」、藤田喬平「飾筥朱雀」、信田洋「黒孔雀の瓶」「立姿瓶」、小林正利「祈り（啓蟄）」、土肥満「向いあう単体」

・彫塑
長谷川昂「釈迦」「舎利弗」「目犍連」「大迦葉」「須菩提」「富楼那」「迦旃延」「阿那律」「優婆羅」「羅睺羅」「阿難」

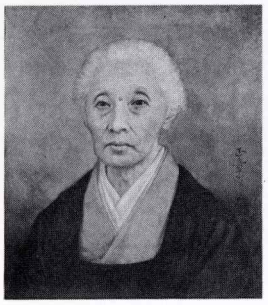
・書
石井雙石「林鳥相応不避人」
浅見錦龍「良寛の詩」、小暮青風「天風」、金子聴松「視思明」
大石隆子「待君」

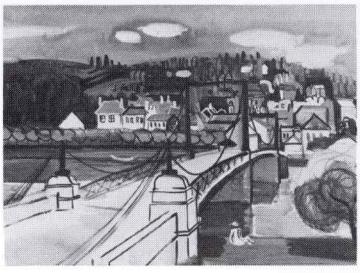
トピックス

和田英作、岡田三郎助等の逸材を育て、のち旧制千葉中学校図画教師としての三十余年、後進の育成に生涯をささげ石井林響、柳敬助等を輩出させた堀江正章を紹介する展覧会を五十三年度に開催したが、このたび西村正名氏より「西村房太郎像」「西村房太郎氏祖母像」の二点が本館に寄贈されました。

また、本年七月二十二日から八月十九日まで、油彩に劣らない力強さと明るく清潔な中に重厚さのある色調で、水彩画の一層の近代化を推し進めた中西利雄に焦点をあてた展覧会を開催し、好評のうちに終了したことは、皆様のご記憶に新しいと思います。これを機会に中西富江氏より「トリエール・シュール・セーヌ」が寄贈されました。

ご厚意にあつく感謝いたします。


堀江正章「西村房太郎氏祖母像」


中西利雄「トリエール・シュール・セーヌ」

第二回美術館協議会開く

去る十二月八日(水)、本年度第二回美術館協議会が開催された。

会議では、昭和五十八年度当初予算要求の概要、昭和五十七年度の事業実施状況について報告された後、本館開設十年を迎える五十八年度の事業、特別企画展、企画展（常設収蔵作品展、千葉県移動美術館、房総の美術家シリーズ）普及事業（実技講座・美術を語る会、美術講演会、夏季大学）等について協議が交わされた。

新収蔵作品紹介（Ⅸ）

先号に引き続いて、昨年度の特別展「浅井忠と京都洋画壇の人々」開催にともない購入、寄贈された作品を紹介します。

中林儁・小川千甕 田中善之助

●寄贈

中林左千夫氏より

中林儁作「山中湖附近」（水彩、三四・〇×四九・五㎝）「冬の風景」（水彩、二五・二×三三・〇㎝）「鳥居」（淡彩、二六・五×三七・一㎝）「風景」（鉛筆、二六・五×三七・二㎝）「保津川上流」（水彩、二六・五×三七・〇㎝）「けしの花」（水彩、五〇・〇×三四・〇㎝）

●購入

小川千甕作「港」（油彩、三二・三×四四・八㎝）

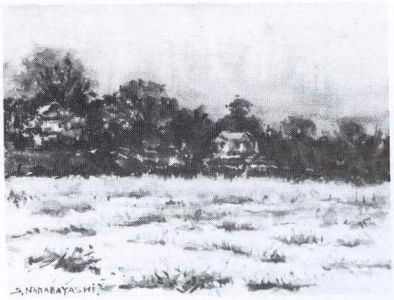
田中善之助作「パリの女」（油彩、六〇・六×五〇・〇㎝）「聖護院の裏」（水彩、二四・二×三五・三㎝）「山門」（水彩、四二・三×三二・一㎝）「高台寺」（鉛筆、四二・二×三四・三㎝）「出町」（鉛筆、四二・二×三一・〇㎝）

中林儁（一八七八～一九三七）、小川千甕（一八八二～一九七一）、田中善之助（一八八九～一九四六）はともに聖護院洋画研究所、続いて関西美術院で浅井忠に学んだ人たちである。中林儁ははじめ伊藤快彦の鐘美会で学んでおり、浅井門下に入る前からすでに京都美術協会、関西美術院競技会、内国勧業博覧会などに出品、賞をとっている。浅井没後は東京に移り、太平洋画会や文展などで活躍したが、長野の高等女学校の図画教員となってからは画壇から遠ざかった。「冬の風景」は冬の夕暮の風景を描いた情趣ある作品であるが、力強いタッチでコントラストのきいた色彩をつかっている。

田中善之助「パリの女」

小川千甕は浅井に学んだ日本画家の一人で、晩年は南画家としてしられる。明治三十九年に結成した丙午会は京都の日本画界に新しい方向を示した。浅井没後、陶磁器試験場技手となり、一時期雑誌の挿絵等も描いた。欧州旅行帰国後は二科会結成に参加、院展洋画部にも出品した。「港」は色調や光のとらえ方、筆づかいに西欧の絵画に学ぼうとする意欲が感じられる。

田中善之助の鉛筆デッサン「高台寺」と「出町」は関西美術院に学んでいた頃の作品である。研究生は教室内だけでなく、よく野外写生にでかけた。構図は浅井の作品によくみられるように、前面に大きく木々を描き、遠近感のある空間に点景人物を配している。浅井没後は黒猫会や仮面会の会員として当時のアカデミックな作風の京都洋画界に新しい傾向の意欲的な作品を発表した。「パリの女」は大正10年の滞欧作である。大まかな筆づかいと情熱的な色彩でパリの女性を描いている。渡仏後は関西美術院の教授となり、また春陽会々員として活躍した。



中林儁「冬の風景」

以上の作品の他、小笠原豊涯作「中井八重子像」（油彩、四六・五×三三・五㎝）桜井忠剛作「バラ」（油彩、二三・六×三二・九㎝）澤部清五郎作「桜」（油彩、六六・九×三九・二㎝）が新しく収蔵された。

＊　＊　＊　＊

表紙作家の紹介

梅原龍三郎

昭治21年（1888～）京都市生。中学3年の終わり頃病気のため中退。伊藤快彦の画塾に通い洋画を学び始めるが、浅井忠の聖護院洋画研究所（後の関西美術院）の創設に伴い同所に入学。同期に安井曽太郎がいる。後に梅原、安井時代と称され、洋画の黄金時代を築いた芽がすでにここで醸成されたわけである。

20才の時にパリに留学し、ルノワールを訪ね以来その教えを受けるが、30才半頃より東洋美術に深い関心を示し、昭和9年頃のたびたびの訪中によりますますその傾向を強めている。

表紙の作品は、昭和12年熱海の別荘で描かれたもので、梅原の最も充実した時期のものであり、文人画風の趣きと豊かな色彩は、後の北京シリーズにつながるものである。

前衛絵画からバルビゾン派へ

〈一枚の絵との出合い〉

飯田祐三

本年七月末、千葉県立美術館夏季大学講座の講師として招かれて、演壇に立たせていただいた。

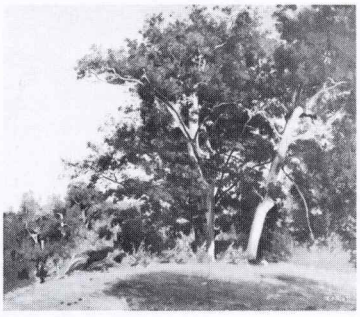
私がミレーの「種をまく人」を山梨県立美術館に納入した当時、新聞社や放送局などから、どうしてミレーやバルビゾンの画家達に傾倒していったのかという質問が多かった。そこで今回の夏季大学講座でもそのことを中心に話させていただいた。以下はその要約である。

私とバルビゾン派の絵画との出合いは、およそ今から二十年程前に遡る。当時はフランスの絵画といえば印象派の巨匠、華々しい活躍をしている現代フランス画壇の巨匠達、あるいは新しい絵画の分野に挑戦している新人や流行の抽象画がもてはやされていた。私もそういった絵画を目当てに何度かパリを訪れていた。

きらびやかなもの、目新しいものを求めてパリ中を歩き回り、それらに打ちのめされて少々うんざりしかけていた時、ふと小さな画廊の片隅で埃を被っているトロワイヨンの小品に目がとまった。それは今まで自分が求めていたものとは正反対の、あまりにも控え目な絵画であった。

森の中の小径にかすかに日が当っている典型的なバルビゾンの絵画であったが、それが私にとっては砂漠の中のオアシスとなった。

しかし私はそれを直ちに買い求めた訳ではない。ほっとして、ただこういう絵もあるのだなと思っただけである。買ったのは別のものであった。店の主人も決してすすめはしなかった。私の興味の対象は強烈な個性や見たこともないような新しい表現様式をもった現代絵画であって、依然としてバルビゾンの絵画ではなかった。それはあまりにも古く、現代生活にマッチするものではない。従ってそれを買って日本に持って帰るなんて考えてもみなかったのである。


コロー「フォンテンブローの風景」

しかしその絵は妙に心に残った。そしてそれ以来、画廊廻りや商売に疲れると、その小さな画廊へ行ってその絵を見るようになった。何度行ってもその絵は埃にまみれたままであった。

いつか私は、その絵が私にとって商売抜きで見る唯一の絵であるということに気がついた。大げさにいえば、その時点まで、私は日本に持って帰って売れる絵を求めていたのであって、売れそうもないというだけで随分といろいろな絵を見過ごしてきたものだと深く反省させられたのである。

私は商売としてトロワイヨンの絵を買うことを決めた。この絵をきっかけとして私はミレー、クールベ、コローやその他のバルビゾンの画家たちの絵を短期間にかなり取り扱うことが出来た。他の画商達があまり扱わなかったこともあって、今から考えるとかなりぜいたくに選別することも出来た。しかしまたバルビゾンに関する日本人の研究書が少ないので、大変苦労させられた面もある。

パリの小さな画廊の片隅にあったあのトロワイヨンの小品の、薄暗い森の中でほのかに輝いていた小径、ミレーやコローが歩いたであろうフォンテーヌブローの森の小径が、いつの間にか自分の画商としての歩むべき道となっているのを知って、私は人と絵の出合の不思議さを思わずにはいられないのである。

（飯田画廊社長）

東京湾の歴史を集約

高橋在久著〈美術館長〉

「東京湾水土記」

東京湾の岸辺に生まれ育った筆者が、自己の原風景を探訪したエッセー集。古代から現代まで、歴史の流れの中で姿を変えつつある〝ふるさと東京湾〟の風土を、あえて水土と表記し、さまざまな研究資料をもとに、東京湾の原風景を描く。

（未来社、一、二〇〇円）

ごあんない

◎第二回美術講演会

特別展「金工の世界」に伴い、本年度第二回美術講演会を行います。

・期日　1月23日(日)
・時間　14時～15時半
・演題　「近代金工への道」
・講師　香取忠彦氏（東京国立博物館金工室長）

◎第五回美術を語る会

展覧会について「語り合い」の中から、作家や作品についての知識や理解を深めるために行います。

・期日　2月6日(日)
・時間　14時～15時半
・主題　「金工の技法と見方」
・話題提供者
鈴木治平氏（東京芸術大学助教授・金工家）

◎書芸研修講座

・期日　2月22・23日
・時間　10時～16時
・講師　浅見錦龍氏
・応募方法　往復はがき

✣ ✣ ✣

団体展（12月～2月）

・こども県展
12月7日～19日
・登龍社・宮坂会書初展
1月5日～9日
・千葉県大学美術連盟展
1月5日～9日
・群鷗書人展
1月11日～16日
・千葉展
1月18日～30日
・千葉県小・中・高書初展覧会
2月1日～6日
・親子絵画展
2月8日～13日
・千葉大学教育学部美術科卒業制作展
2月8日～13日
・千葉大学生書道展
2月8日～13日

来館者

9月

14　教育長　特別展を観覧
15　横山大観記念館一名
18　町田市立博物館一名
26　講演会講師朝倉治彦氏
27　文部省教科書管理課長他一名

10月

3　国立国会図書館二名
4　茨城県美術博物館一名
9　美術を語る会話題提供者森田保氏
10　日本地図資料協会一名
神奈川県立近代美術館四名
13　国立歴史民俗博物館二名
26　熊本県立美術館二名

11月

19　山梨県立美術館一名
25　教育委員他九名視察

12月

2　愛知県美術館長他一名

日誌抄

9月

10　美術資料審査委員会
11　特別展「絵地図の魅力」始まる（～10月13日）
21　千葉県移動美術館始まる（佐倉市～10月3日）
26　第一回美術講演会
28　彫塑入門講座始まる

10月

6　千葉県移動美術館始まる（柏市　～19日）
9　第四回美術を語る会
16　日本画入門講座（二期）
洋画研修講座（三期）始まる
27　書芸入門講座始まる
30　洋画入門講座（二期）始まる。

11月

9　陶芸入門講座（二期）始まる。
18　千葉県博物館協会県外研修（群馬県　～19日）
20　七宝焼入門講座（～21日）
27　関東地区博物館協会調査研究委員会

12月

2　学芸課長部会（栃木県）
4　てん刻入門講座（二期～5日）
10　美術館博物館館長会議

年末年始休館
昭和57年12月26日～昭和58年1月4日

近代日本洋画のルーツを探る
フランス集中研修　8日間

浅井忠・黒田清輝の足跡を訪ねて!!

昭和58年2月22日(火)～3月1日(火)

¥328,000

千葉県立美術館友の会及び浅井忠研究会の後援で「近代日本洋画のルーツを探るフランス集中研修」旅行を企画し、参加者を募集しています。

訪問地は芸術の都パリとその近郊にしぼり、一般の旅行では訪れることがなかなかできない美術館や浅井忠、黒田清輝が滞在し、数々の名作を生み出したグレー村や十九世紀バルビゾン派のミレー、コローたちが住んだバルビゾン村など、じっくり見学します。

申込み・問合せ先
㈱日本交通公社　営業三課加藤グループ☎〇三―五〇四―三六三一